

「剣を鋤に」 敗戦記念礼拝 2020年8月16日

前奏

開会賛美 新聖歌349 『移り行く時の間も』

開会祈禱

主の祈り 今朝は特別に、続いてアッシジのフランシスコの「平和の祈り」を祈りましょう。スクリーンをご覧ください。

ああ主よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください。

憎しみのあるところに、愛をもたらすことができますように。

争いのあるところにゆるしを、

分裂のあるところに一致を、

疑いのあるところに信仰を、

誤りのあるところに真理を、

絶望のあるところに希望を、

悲しみのあるところに喜びを、

闇のあるところに光をもたらすことができますように。

ああ主よ、わたしに、慰められるよりも、慰めることを、

理解されるよりも、理解することを、

愛されるよりも、愛することを求めさせてください。

わたしたちは与えるので受け、ゆるすのでゆるされ、

自分自身を捨てることによって、永遠の命に生きるからです。

アーメン

導入

昨日は、終戦記念日でしたが、今朝は終戦ではなく敗戦記念礼拝としました。日本が無条件降伏をして敗戦を認めた日だからです。戦争は自然に始まるものではありません、終戦と呼ぶことによって、戦争が知らないうちに始まり、知らないうちの終わったかのように考えないようにしましょう。誰かが戦争を決断したのです。日本人だけで310万人の命を奪い、韓国・中国、東南アジア諸国の日本軍による戦死者や被害者は2千万人を超えて数え切れません。そんな人命の損失と破壊の罪悪から、私たちは忘れずに学ばなければなりません。

8月15日の敗戦記念日は、忘れてはいけない日であり、日本人が喪に服して悔い改めるべき日でしょう。これからは2度と同じ誤りを繰り返さないために、強い決意をするときでしょう。吉永小百合さんは原爆の詩の朗読会をして反戦活動を続けておられますが、先日TVで、「戦後を終わらせないように、ず

一と戦後であってほしい」と言うておられました。戦後が終わったと言うて、戦争の事実を忘れてしまわないように願っているのです。

しかしながら8月15日の敗戦記念日は、もうすぐ忘れられる日になりそうです。すでに日本の人口の83%が戦後生まれだそうです。つまり敗戦前に生まれた人はわずか27%なのです。戦後世代と言えば4世代に分類できるそうです。

**戦後第1世代 戦争体験者**

**2世代 父母が戦争体験者**

**3世代 祖父母が戦争体験者**

**4世代 祖父母が戦後生まれの戦争未体験者**

つまりもうすぐ家族みんなが戦後生まれで、家族から戦争を聴く機会がない世代ばかりになる。忘れてはいけない日であるなら、自覚して継承しなければ、戦後は忘れ去られて、終わってしまうのです。ずーと戦後であり続けましょう。

しかし8月15日敗戦記念日は、忘れてはいけない日です。もし私たちが悲惨な戦争をして敗戦したという事実を忘れたら、危険だからです。今この国が動いている方向を考えると、忘れたら危険です。必要ならまた戦争をしようとする勢力がうごめいているからです。

日本は二度と戦争をしませんと、国家として誓いをしたにも関わらず、最近では憲法の文言を変えて、またその解釈を変えて、再び戦争が出来る国家にしようとしています。

さらに最近では専守防衛では国土を守れないからと、相手ミサイル敵基地攻撃能力を保有すべ気だと主張しています。やられる前にやっつけよう、と敵基地への先制攻撃を可能にしたいようです。積極的平和主義と言いながらそれをするなら、それは奇襲であり、だまし討ちです。卑怯極まりない日本民族になるでしょう。

現政権を支える政党はそんなことまで可能にしたいと考えているようです。大変です。このまま進んで、もし再び戦争をして悲惨な結果を迎えた時、子や孫たちに問われるでしょう。お爺ちゃん、どうして戦争への道を止めてくれなかったの？と。いつの日か、いまここにどう生きたかと責任を問われるのでは、と恐れます。

敗戦記念礼拝のために準備をして、戦争について聖書を読み返して瞑想しました。その個所を紹介します。

### 聖書朗読

**マタイ 26:47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二弟子のひとりであるユダがやって来た。剣や棒を手にした大ぜいの群衆もいっしょであった。**

群衆はみな、祭司長、民の長老たちから差し向けられたものであった。

26:48 イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ」と言っておいた。

26:49 それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で」と言って、口づけした。

26:50 イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。

26:51 すると、イエスといっしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃ってかかり、その耳を切り落とした。

26:52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。

マタ 26:47-56 に記されてあるドラマチックな出来事です。ユダは主イエスに近づき口づけしました。そこで何人かがイエスに手をかけて捕らえようとしていました。

危機一髪場面です。皆さんは剣や棒を持った暴徒に囲まれたことがありますか？ 私は在ります。40年も昔で、インドネシアにいた時です。華僑の学生とジャワ人の学生のオートバイ事故がきっかけで、反華僑暴動が起こり、暴徒が華僑の店に投石を始めたのです。良く行くレストランが投石されたと聞いて写真を撮りに行きました。ところが帰り道、路地から出て来たオートバイの一団と鉢合わせし、私を中国人だと思った一団に止められ囲まれてしまいました。一触即発いや一石触発、誰かが石を投げたら、もう最悪を覚悟したのですが、後ろに乗せていたジャワ人のマスミンがジャワ語で、「この人は中国人じゃない、日本人の牧師だ」と叫んだのです。リーダーが近寄って来て、私の顔を覗き込みました。彼はオートバイの方向を変え、手を挙げて指示を出し、一団は過ぎ去って行きました。間一髪、不思議に守られました。

暴徒に囲まれ、一触即発の状況で、ペテロは思わず主イエスを守ろうと剣を抜き、その一人に撃ってかかり、その耳を切り落としたのです。

マタイ 26:52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。

もし止めなかったら、弟子団と暴徒たちの大乱闘になったでしょう。主イエスはそれを防ごうとされたのでしょうか。そしてもう一つの目的がありました。主イエスは言われました マタイ 26:56 「すべてこうなったのは、預言者たちの書が実現するためです。」

成就しなければならない預言は2つあったと私は思います。第1の預言の書は：

イザヤ 53:5 彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たち

はいやされた。

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通される、とあります。救い主メシアは人類の罪の贖いのために、死ななければならなかったからです。

成就しなければならない預言の2つ目の預言の言葉を瞑想しましょう。

イザヤ 2:4 終わりの日に、主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。

終わりの日に、神様の御支配が完全に確立された日、御国を来たらせ給えと祈るその御国が成就したと日の預言です。主なる神様の御意志が世界中に成就した日、人々は、その剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。と言うのです。それが神様の御意志です。それを成就するのには、剣や槍ではダメなのです。剣や爆弾は目的を達成するのにふさわしい手段では無いからです。

マタイ 26:52 そこで主イエスは言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」

そもそも戦争とは何でしょうか？

「文化人類学事典」によれば、

「人間の衝突には、略奪、殺戮、紛争、そして戦争が在る。戦争とは異なる政治統合を持つ集団間における組織的武力衝突のことである。戦争の大きな特徴は組織的である、ということである。つまり、戦争は社会的行動なのである。戦争における武力衝突は、命令と服従を了解する集団の規範を前提にしていなければ成立しない。」

確かに為政者が宣戦布告をして戦争を始めるのです。確かに戦争では「爆撃はじめ」と命令する人がいて、砲弾が飛び、爆弾を落とし、「撃て」で銃で撃つて人を殺すのです。つまり戦争は自然発生するものではなく、あくまでも社会的な行動であり、人間が作りだすもので、人間が組織的に互いに殺し合うことなのです。

戦争が社会的行動とは、政治的ということでもあります。つまり時の政権が戦争を始めるといふこと、そして戦争に勝つために、その権力を使うということなのです。こういうことです。

内閣が戦争の準備を始めても、特定秘密情報なのでと隠します。ある国やある民族がどんなに悪いかを宣伝し、国土国民を守るためにと、戦争が必要だと宣伝を始めます、つまり為政者が情報統制を始めるのです。

次に為政者は、戦争に反対する人を黙らせようとします。戦争反対の集会を禁じたり、戦争反対の本の出版を禁じたりします。それでも反対する人は逮捕して殺してしまいます。つまり自由な表現を抹殺するのです。

さらに戦争反対の声を抑えるために、町内会やサークルのメンバーに仲間の言葉や行動を、警察に報告するように決め、人々が戦争に協力するように相互監視するように仕向けます。つまり自由で安全で明るい日常生活を壊し、猜疑と恐怖におびえる社会にします。

戦争を遂行するためには、とてつもないお金が必要です。だから美しい国を守るための特別税金を作ります。お寺の大きな吊り鐘で戦車を作り、教会の献金で飛行機を作るように強制します。

戦争のためには兵隊が必要です。「若者よ、お国のために立ち上がれ」と言って集めます。足りなくなるので、誰でも兵隊に引っ張れる徴兵の法律を作って集めます。戦闘で100人死んでも、1万人戦死しても、「勝つためには仕方がない」と司令官は言い、防衛大臣はお国のために死んだ英霊だと宣伝します。

今話したことは嘘ではありません、作り話でも誇張した話でもありません。今から90年前から始まり75年前に終わるまで15年間、この国に全部実際に起こったことです。戦争とは異なる政治統合を持つ集団間における組織的武力衝突のことであって、人間が作り出す社会的行動なのです。そして生み出すものは、破壊と悲惨です。戦争は、私たちの自由と日常生活と生きる権利と命とすべてを奪うのです。

### 戦争で失われた学徒兵の青春（顔写真をPPTで投影する。）

長谷川信は1922年、福島県会津若松市に誕生、1942年に明治学院高等学部厚生科に入学しました。古い写真ですが、イケメンでカッコ良いでしょう。会ったことはないのですが、おそらくめぐみ教会の青年たちのように、前途洋々たる才能に溢れる好青年だったでしょう。しかし戦争がすべてを変えました。1943年12月に入営、陸軍特別操縦見習士官から陸軍少尉となりました。彼は真剣に生きようとし、軍隊生活の中で悩み苦しみました。「きけわたつみのこえ」（聞け、はかなくも海に沈んだ魂の声を）からです。

「1944年4月26日 俺は人間とくに現代の日本人の人間性に絶望を感じている。恐らく今の人間ほど神から遠くかけ離れた時代はないと思う。人間の獣性というか、そんなものが深く人間性の中に根を張っていることを、しみじみ

と思う。人間は少しも進歩していないのだ。今次の戦争には、もはや正義云々の問題はなく、ただただ民族間の憎悪の爆発あるのみだ。敵対し合う民族は各々その滅亡まで戦いを止めることはないであろう。恐ろしきかな、あさましきかな、人類よ。猿の親類よ。」

彼は1945年4月12日与那国島北方洋上にて戦死しました。23歳でした。悲惨なのは、自ら肯定することが出来なかった戦争のために、命を捨てざるを得なかったことです。あまりにも辛いあまりにも短い一生でした。戦争とは、この事実のように、こんな青年の日常も希望もいのちも蹴散らかしてしまう恐ろしいものなのです。

有名なナショナル ジオグラフィック日本版6月号の特集は「戦後75年」で、その副題は「すべての体験者が認める「戦争は地獄だ」だそうです。これも誇張ではありません。現代の戦争は原子爆弾が空から降ってくるのです。日本中の都市は広島長崎のようになるのです。もし始めれば、その地獄を避ける方法はないのです。

戦争は社会的行動で、人間が作り出すものであれば、作り出さないという道もあるはずで。そうです。国々の指導者たちが戦争なんかしないと決意すれば良いのです。ノーベル平和賞を受賞したアフガニスタンの女性 マララ・ユスフザイさんは言います。

「どうして『強い』といわれる国々は戦争を生み出す力がとてもあるのに、平和をもたらすにはとても非力なの？ なぜ銃を与えるのはとても簡単なのに、本を与えるのはとても難しいの？ 戦車を造るのはとても簡単で、学校を建てるのがとても難しいのはなぜ？・・・」

機関銃や戦車を作らずに本を作れば良いのです。原爆を作らずに学校を建てる方が良いのです。殺し合いするよりも、助け合う方がずーと良いのです。滅ぼすよりも生み出す方が良いに決まっています。私たちはそのいずれでも選べるのです。だから戦争はしない、地獄は作らない、と決意すれば良いのです。

実は地獄を経験した私たち日本人は、75年前もう2度と戦争はしないと決意したのです。日本人全体の決意の表明が日本国憲法だと言えるでしょう。敗北を受け止めた当時の日本国民が告白した文章をよみましょう。

参考資料 日本国憲法 前文

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起るこ

とのないようすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。

そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。

われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

何と崇高な理想と気概でしょうか。剣を取る者はみな剣で滅びます。主イエス様の言葉の翻訳のように思えます。この理想を基に憲法9条が制定されました。

第9条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動する戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

2 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

国際紛争を解決する手段としては、武力の行使によってではなく、外交によって平和をつくる、平和は軍事ではなく外交で作る、これが決意でした、心に刻みましょう。

現実には私たちの欲と罪が膨らみ、内戦や国家間の戦争を起こしているのです。奪うのではなく与え合い、憎むのではなく赦し合い、敵対するのではなく愛し合うなら、人と人との関係に和解がなされ、平和が生み出されるはずです。キリストのように生きることこそ神の御国が実現していくと信じて、勇気と希望を持って進みましょう。敗戦75周年の今朝一緒に祈りましょう。

**祈祷** スクリーンの祈りを私が祈ります。もしその通りだと賛同して下さるなら、みなさん、最後にアーメンを唱和してください。

**平和なる神様。**

あなたは救い主イエス・キリストを、この世界にお遣わしになり、人間を隔てるすべての敵意の壁を打ち壊されました。

人と人、民族と民族、国と国を争わせる、傲慢と敵意を取り除いてください。

**愛のみなもとなる神様。**

あなたは自分を愛するように、隣人を愛せよと言われました。

私たちのうちから深い憎しみや偏見を溶かしてください。

十字架によって示された、救い主の優しい愛で私たちの心を満たし、いかなる時も父なる神に信頼し、奇しき希望に生かしてください。

**世界の主権者なる神様。**

あなたの摂理により、権威を委ねられているこの国の為政者たちが、眼には見えませんが、あなたを畏敬（おそれ）て、

この国を、正義と公正、平和と福祉に満ちた国へ、

そして決して再び戦争をする国にならないように導いてください。

**永遠の希望なる神様。**

世界中の指導者たちに崇高な国の幻を与え

互いの政治的な対立や経済的な利害を超えて平和を守り、

あなたの国の平安と祝福を運ぶ者にしてください。

**私たちの主なる神様**

私たちは、情けない自国の過去を直視します。

そうしなければ、また同じ過ちを繰り返すからです。

私たちは決意します、他民族を傷つける戦争を二度としないことを。

私たちを用いてください、日本民族が平和をつくる国になるために、  
主イエス様のお名前の故に祈ります。アーメン

**応答賛美** 教会福音讃美歌 482 「昔主イエスの」

**祝等** 箴言 20:3 争いを避けることは人の誉れ、愚か者はみな争いを引き起こす。

マタイ 5:9 平和をつくる者は幸いです。

その人たちは神の子どもと呼ばれるから。